例えば2年の命

例えば2年の命プロジェクト

そんなことをしたことがある。
それは、引っ越しがきっかけだった。

その時、私は失恋をしてめそめそしていた。
めそめそが行動を誘因するのである。
まず、冷静に考えて部屋を引っ越す事にした。
心機一転は部屋探しから。

その時、住んでいたのは2Kの部屋だった。
京王線「仙川駅」から徒歩5分、商店街を抜けるとすぐのマンション。風呂、トイレが別。1階の部屋で、春に桜をみることができるのがチャームポイントの部屋だった。なかなか、住み心地は良かったけれども日当りがイマイチだったのと、家賃が8万ちょっとだったのでこの機会にもっと良い場所にいこうと考えた。

無条件に、もっと良い場所に行けると思ったのは願いを叶える為のポイントかもしれない。その思いをもとに住みたい場所のイメージリストを作成した。

1　傷ついているので、とにかく日当りの良い部屋希望
2　今までよりも駅近
3　部屋の広さも２Ｋ以上
4　トイレ、風呂は別々
5　家賃は７万以下
6　京王線より中央線できれば吉祥寺か三鷹

と、いうイメージリストをさくさくと作成した。当時、吉祥寺と三鷹というのは住みたい町ランキングでいつも上位の人気タウン！その人気タウンに住みたい！
しかも、駅近で日当り良しの物件。
なんて、言ったらかなり無謀な注文であった事は間違いないと思う。

だから、この条件をもって不動産屋巡りをするとない、ない。
本当に、ない。

だけれども、なんだか絶対に見つかる気がしていた。
だって、私はとても傷ついていたから。

何軒か不動産を見てまわった。家賃を2倍くらいだしたら見つかったり、駅から遠かったり。
そして、何より日当りの良い部屋で駅近というのはかなり、無理難題であることを理解しつつあった。

部屋探しも大変だなあ。
なんて、思っていたら・・・

なんと！
出会ってしまったのである。
私のリストを全て叶える理想の部屋が！

しかし、リストに無い条件がついていた。

2年後、更新できるかわからない物件。

もしかすると、取り壊しするかもしれない物件。
たしかに、リストにない。
面倒くさがりの私は、2年後引っ越しをするかもしれない物件というのは考えられなかった。
また、部屋探しなんて・・・

面倒くさい。

全て、私の条件を満たす部屋だけれども。
ないな。
残念ですけど・・・
そう思って、その部屋をあとにした。
そして、部屋探しを続けた。

それなのに・・・
ないな。
って、思っているのに・・・
私の条件を全て満たすその部屋に、暮らしているイメージ映像が、わたしの頭の中にやってくる。
やってくる。

そのイメージ映像というのは、実にぱっとしない映像で
その部屋に住んでて、料理をしている私
とか
ざぶとんを片付けている私

とか
そう。
そこに暮らしている日常的な映像が、ぽつぽつと湧いてくるのである。はじめは、面倒くさくて気がつかないふりとかしていたんだけれども。
そんなイメージ映像がしつこく1週間、浮かんで浮かんで仕方なくなってきてしまった。こういうのが白昼夢っていうのでしょうか。

1週間後、私はとうとう観念した。

その部屋を扱う不動産屋へ・・・
そして、あっさり、契約。
その日のうちに鍵をもらった。
その部屋は、契約した不動産屋の隣の隣のビルだった。
そう。なんと！マンションとか、コーポとか、アパートではなく、その部屋はビルの1室だった。

それが、運命の部屋三〇三号室との出会い。

鍵をもらったので、ついでに部屋をのぞきに行った。

季節は、銀杏の葉が黄色くなるころの午後。
少し、寒くなってきた頃だったと思う。
鍵をあけて、中に入ると・・・
ほわ～んと、あったかかった。

まず台所があった。
その奥に6帖、その横に並ぶ形で4帖半の畳の部屋。6帖の部屋と4帖半の部屋の間は襖で仕切られていた。
ベランダはなくて、古い磨りガラスがはめられていた。
6帖の部屋に入ると、夕方の光が磨りガラスを通してきらきらその部屋に入っていた。うっすら黄金色に染まる部屋。
なんだか、とってもキラキラしている部屋だった。
なんか、いい感じだなあ。
ここに、決めて良かったなあ。
なんて思っていたら・・・

突如

例えば、2年の命

と、いうフレーズがどしり。
私の身体の中に入ってきた。

なになに？
なんて、しらを切ろうとしたんだけれども。

例えば、２年の命

と、いうフレーズが
どしり。

あれをなんて、表現したらいいんでしょうかねえ。
言葉であって言葉でないし
音のような気もするんだけど音でもないし
テレパシー？
みたいなものになるのかな。
そんな、言語を超えたメッセージみたいなのが

どしり

って、私の中にやってきてしまった。
こういうことって、あんまりないんだけれどもたまにある。

面倒くさいな
って、いうのが正直な感想。
でも、無視できないのが私。

参ったなあ・・・

なんて、思いましたが。

やりました。

例えば、２年の命。

今、考えるとすごく良い経験をしたものだと思えますけど・・・

でも、この話をすると大方の人は私を不思議ちゃん扱いをする。
ま。
仕方ないと思いますけどねえ。

わたしも、正直わからないですもの。
あの感じ。
でも、直感みたいなものあるでしょう？

そして、運命の三〇三号室はたぶん、意識をもった部屋だった。
と、思う。
そういう部屋ってあるんだな。って、はじめて思った。古い部屋だったからかもしれない。

そう。
そんな、部屋に遭遇してお題まで頂いたらやるしかない！
でしょう？

とは言っても
やらない！

と、いう言い訳も、たくさん自分の中に出てきたのも本当の話。
だって、自分勝手な勘違いの可能性高いし。なんの保証もないし。面倒くさい。
部屋にお題を出されたって、なんじゃらほい？ほい？
よくわかんない。
と、いう私がいたのも本当の話。
やろうとする私　と　やらないでおこうとする私。
でも、今回はやろうとする私のほうに軍配があがった。
と、いうだけの話。

そんなわけで、真剣にやってみた。
例えば、２年の命。

うっかり、やったことのあれやこれやを忘れてしまいそうになりますが・・・

だから、ゆっくり思い出しつつ綴って行こうと思ったわけです。今、こうして思い出していかないと本当にすっかり忘れてしまいそうだから。

例えば、２年の命プロジェクト。

と、いうのはうっかり忘れがちな

いつか、死ぬんだ

ってことを自分の中にきちんと置いて息をする。
と、いうこと。
私にとって、すごく貴重な体験のひとつ。なのに、それすら忘れていこうとする、この現実。
少しの焦燥感に促されて

TENKO BOOK プロジェクトのはじまりです！

まず、したこと。

もしも、2年の命だったら？
に、ついて真剣に考えた。そうしたら、やはり出てきますよね。
やりたいことリスト。
そして、やりたいことリストを作ってみて驚いた事。
思っているよりはやりたいことが少なかったこと。

1　個展を開催する
2　フランスに売り込みにいってみる
3　旅をする
4　本をつくる
5　家族を大事にする
6　毎日、作品をつくる（版画）
7　空をとぶ
8　井の頭公園でポストカードなど作品を売る
9　イルカと友達になる

10　馬に乗る

思い出すと、このくらいしか思い出せない。
毎日、考えてこのリストを増やしていったからもっと長かったけれども、
そのリストはもう手元にないので思い出せない。
小さくやりたいことリストもあった。
と、思う。

1ヶ月に一回はやきとり屋（番番）に行く
とか
毎日、散歩する
とか
笑って過ごす
とか
週末はケーキを食べる
とか
英語を勉強する
とか

ジムに通って、強靭な身体を手に入れる
とか
そんなものも入っていたように思う。
それで、絶対したいこと
できたらしたいこと
なるべくしたい事
に、優先順位をつけたところまで記憶にある。

そして、そのリストを見て本当にがっくりきたのも覚えている。

なぜなら、もっと沢山やりたいことがあると、思っていたから。
その短いリストにショック！だったわけなのである。

だから、逆に少しでもやりたいことにはやっていこう！
と、決意したのもこのリストのおかげ。
少しでも、興味あったら首をつっこんでみたり。少しでも、観たいなって思った映画は率先してみたり。読みたいなと、思った本も同じ。そうそう、全てにイエス！そんな気分。

そんな風に思えたのは、意外とやりたいことのリストが短かったからかもしれない。

そんなわけで地味に、思いつくままやっていた。
と、思う。
細かいやったことは忘れちゃったくらい。
だから、とくにやったことで印象的だったことをいくつか書き綴っていこうかな。

それにしても、記録をとっていないと本当にいろんな事を忘れてしまうものなんだなあ。
と、実感。

ただ、記憶に残っているというだけで
それは、ステキなことなのかもしれない。

ちなみに、この「例えば2年の命プロジェクト」をしていたのはわたしが29歳から31歳のできごと。
そんなに、めっぽう若かったわけじゃないのが興味深い。
そして、そういう年齢でこうしたことを本気でしちゃう私もなかなか興味深い。

2年の命プロジェクト

時系列を無視して、やったことを箇条書き。

1 初個展をした
2 フランスに行って、ギャラリーに売り込みしてみた
3 マウイ島に行った
4 一年経ったところで断髪式をした（つまり、坊主になった）
5 残りの命が一年になった時に仕事をやめた
6 母の手術があって毎日病院通いをした
7 肉屋のミサちゃんとルームシェアをした
8 高校時代の友だちあゆちゃんとルームシェアをした
9 あゆちゃんと四国に行った
10 屋久島へカブを買って旅行した
11 砂丘チェックの旅をした
12 花屋で花個展をした
13 井の頭公園デビューをした
14 スパイスカフェにて個展予約した

こうして、箇条書きにしてみると。こんな、ものだったかなあ・・・
なんて、思ってしまう。

だけど、その一つ一つが良い経験だった。
と、いうことは胸をはっていえる。そして、やりたいと思うことは実はできることなんだっていうことを知った。自分の容量を超えるようなやりたいことなんていうのは、意外にも思いつかない事なんだと思う。思いつくと、いうことはできることなんだな。

思いつくと、いうことに敬意を表してまじめに取り組む。
それが、生きている甲斐なのかもしれないな。
ふむふむ。

井の頭公園デビューの巻

東京の武蔵野市にある井の頭公園。最寄り駅は「吉祥寺」と「京王　井の頭公園」。
私が住んでいた頃、井の頭公園では週末の土日はイラストレーターやらミュージシャンやら旅人風のモノ売りやらが勝手に店を広げていた。自分の作品を並べたり、マジックショーをしたり、漫画の読み聞かせやら、ギターの弾き語りやらとにかくいろいろな人がそこに集っていた。面白い場所だった。

私はよくそこに遊びに行ったし、よくわからないモノを買ったりしていた。そう、例えば、チベタンボールとか。なかなか、魅力あふれる公園だったのは間違いない。私も版画を刷っているので、何気なくそこに参加するのはいつでも可能の場所だった。

いつでもできる事というのは案外すぐにはやらないもの。
私もいつかしようかなあ。
なんて、言いつつ行動はできていなかった。

たぶん、そういう事って沢山あると思う。

でも、もう2年の命しかないのである。
今、できなかったら死ぬまで出来ない。
今、できることは今しよう。
そういうことなのである。

そんなわけで、しましたよ。
公園デビュー。
自分の作品をポストカードにして、敷物もって、お菓子もって、水筒もって。
いざ、公園へ！

若干、勇気のようなもの。
必要でした。
すでに店を広げている人に

「隣、いいですか？」

なんて、声をかけて。
公園の一番はじっこの出口付近にて、初の公園デビュー。

面白かった。

何が面白いって。
まず、売れないの。
全然。
1枚百円のポストカードが全然売れない。
1枚、手摺りの手間暇かけたポストカードだったけれども。

売り方も、心意気もダメだったと思う。
だけど、見る側と売る側の目線の違い。

これまた、面白かった。

公園でモノを売る側はこういう目線なんだ。って、思った。
通り過ぎて行く人がとくかく大きくみえた。
地べたにポストカードを置くのは多分、あんまり良くない。
と、感じた。

目線を合わせた場所に置くほうが、きっと親切なんだろうな。
なんて、思った。
場所も、もっと賑やかな場所のほうがいいんだとうなあ。
なんて、思った。

そして、売るものと買う人の距離感はきっと近い方がいいのだろう。
って、予測した。

ふむふむ。

面白いなあ。
って、売れない事を楽しんでしまった。

やってみないと、わからない。
って、こういうことよね・・・

ふむふむ。

午前中から午後までそこにいたけれども、私の目線と一緒になってくれたのは来てくれた友達の奈緒ちゃん一人だけ。

結局、1枚も売れなかった。

好きな事で百円すら稼げないという、現実。

働くって、すごいなあ。
お金を稼ぐって、すごいなあ。
仕事があるって、ありがたいなあ。

と、実感する一日。
本当に絵を売って食べるのだとしたら、面白いなんて言っていてはダメ。
これしかない！
と、いう気合いでいかなくちゃ。とも思った。

2年の命すべてを賭けられるか？
と、いう問いがうまれた。

その時の私の答え

絵だけの生活で2年の命を全て賭けることはできない。
けれど、やめる事もできない。

版画はわたしにとって、言葉ではなくて
自分でも知らない自分を感じる為の道具だから。

ふむふむ。
とにかく、自分に正直に。
やりたいことをやりたいようにやろう。

井の頭公園デビューの帰り道、そんなことを心に誓った。

マウイに行った

当時、イベント会社に勤めていた。私の主な仕事はイベントを開催する上でのマニュアル作り。おもに簡単な印刷物制作をしていた。その会社に勤めている時に出会ったのがマウイ大好きのユキさんだった。

ユキさんは、事務関係のスペシャリストだった。そんなに、ユキさんと仕事の絡みはないのに何故か隣の席だった。私が原稿待ちで時間が空いている時は、ユキさんの仕事を手伝うのが好きだった。ユキさんの仕事を手伝うといっても、書類をまとめてホッチキスするとかの単純作業だったけれど。ユキさんは仕事はできるわ、美人だわ、優しいわで、面白いわで、大好きな人だった。

そして、色んな話をしてくれるところも大好きだった。大会社の秘書室にいた時の話とか。そう。秘書が、10人もいるようなところで働いていた秘書時代のお話とかお気に入りだった。

その大会社には来客データーベースというのがあって、来客があったらその人の持ち物の色、ブランド、特徴まで全て記録するのよ。なんて、話は私の世界からは、本当に別世界で聞くだけでワクワクした。大事な商談の時はそのデーターベースを参考にその商談がある部屋に飾る花の色から絵から全てに気を使うんだから。そういう、細かい気を使って商談がうまくいくと本当に嬉しかったわ。なんて、話は目をキラキラさせて聞いていたと、思う。

そんなユキさんは、ハワイにあるマウイ島をこよなく愛していた。お昼のランチを食べに行った時なんかによく話してくれたのがそのマウイ島の話しだった。ユキさんのマウイ島の話は、とにかく魅力的だった。まあ、正直な話ユキさ

んの話は、どれも面白くて楽しかったんだけど。
　でも、マウイ島の話はマウイの空気をまとって、マウイの風をその場に起こすようなそんな話し方だった。そんなわけで、すっかりわたしはマウイ島に興味津々になっていた。

別に豪華な何かがあるわけではないの。ただ、行くたびにいつも何かを与えてくれる場所なのよ。

もう、わたしには2年の命しかない。
そう思うと、これは是非とも行かなくては行けない場所のように思えた。引っ越しも落ち着いて、井の頭公園デビュー
もして、意気も上がっていたと思う。
行きたいところには行っておこう！
観たいモノは観ておこう！
食べたいモノは食べておこう！
やりたいことはやっておこう！
読みたいモノは読んでおこう！
会いたい人には会いに行こう！

まあ、そういうことなのである。

と、いうわけで初のアメリカ旅行へ！

ユキさんおすすめのメモを持って、いざ一人旅！
宿はユキさんの友達が経営するコテージ　オハナに決定！
ちなみに、オハナはハワイの言葉で家族。
ユキさんの友達ということで安心度２００％！
しかも、ダイビングも日本語で案内してくれるとのことで久しぶりにダイビングもいいかも！
と、にやり。

この、マウイ島旅行で痛感したこと。
それは、遊びというのはスパイスとして
「死ぬかもしれない」
要素が入ってこそ、真の遊びといえるのではないのか？
と、いうこと。

そう。ゆるゆる旅の中にも、恐怖体験がいくつか。。。
とくに忘れられないのが、ハレアカラという山に朝日を見に行って帰りは自転車で帰ってくるというツアー。

ハレアカラというのはハワイの言葉で太陽の家。標高約３０００メートルの山。この山から、拝む朝日は本当にパワフルで、太陽の家も納得な山。太陽が昇ってくる前の星空も星がすごく近くて、それはとても感動的。
その感動体験のあと、少し下ったところから自転車に乗って下山。山だから、全て下り道。そして、くねくね道。私が参加した時のメンバーは、日本人はわたし一人であとはアメリカ人のおじさん、おばさん。このおじさん、おばさん達は暖かいマウイにアメリカ本土からバケーションにきているとのこと。
そんなメンバーを確認して少し安心。少し年輩だからまさか、無茶はしないでしょう。よかったわあ。なんて思ったのである。
しかし、いざ自転車に乗ると・・・
皆様、スピード狂。
「イエーイ！！」
とか
「ワオー！！」
とか、言ってブレーキをかけるという事を忘れている模様。あれには、本当にぶったまげた。
だって、道はアスファルトですけどね。ガードレールがないんですよ。
つまり、うっかり道を外れたら落ちちゃうんですよ。しかも、山の上のほうには木とかないわけです。空と道の境界線的を感じる、そんな道なんですよ。なんて、表現したらいいのかな。空と道しか視界に入ってこない感じ。
そうそう、そんなわけでツアー参加の前には事故っても文句言いません的な文書にサインもさせられるんです。スカイダイビングとかでも書かされる、あれです。つまり、年に何人かは亡くなってしまうツアー。

だから、私はゆっくり行くものだと思うわけです。
でも、違いました。必死でついていく私ですが、皆様のスピード狂にはなかなかついて行けず。ガイドの人が必死に英語でスピード出せ！
って、私に言いますがなかなか出せず。
だって、本気で怖いんですよ！
私なりに出しているんですよ！スピード。正直、涙目です。
で、とうとう道の途中。皆様が止まって私を待っているという事態が・・・
そして、ガイドさんが皆様の前で
「ギブアップ？」
なんて、聞くんですよ。もちろん、私は大きな声で
「ノー！！！」
そして、皆様の温かい拍手と笑顔。あれは、ちょっと屈辱的。そして、人は年齢で判断してはいけないのだ！という教訓をまた一つ。
皆様の温かいお許しのなか、今度は一番前になって再スタート。その後のことは、あまり覚えてない。とにかく、必死に下った記憶と景色がどんどん変化していく様子。山の上は植物がない状態から木が茂ってきて、遠くの方に虹なんかがみえてきたり。そんな山を下りるだけで、ドラマチックな景色展開だった気がする。
あと、覚えている事といえば！
最後に、みなさまと一緒にカフェみたいなところで朝食を食べたこと。

食べるっていう行動がすごく生きているなあ！って、実感したこと。
ものすごく、コーヒーに癒さたこと。
恐怖体験のあとのコーヒーは格別だったこと。

あのツアーは、無事下山できたら本当に素晴らしいツアー。
生きている事を実感できるツアーの一つ。

あとは・・・そう！ダイビングをした！ダイビングの免許をとって5年ぶりくらいのダイビング。わたしの行った季節はちょうど、クジラがきている季節。
オハナのオーナーのヒロさんに

潜るとね、クジラの歌声が聞こえるんだよ。でも、その歌声がきこえる時はクジラに会えないんだよね。潜っていて、クジラに会えるときはクジラの歌が聞こえない時
ぬーーーーっ
て、いきなりクジラが出てくるんだよ。でも、こちらから探して会うようなことは、してはいけないんだよ。
あと、イルカの声もきこえるよ。

なんて、聞いたら。

潜るしかないでしょう？
ダイビングってどんな感じだったか、すっかり忘れていましたが・・・

と、いうわけで
いざ！ダイビング！
この時は、新婚旅行で来ている日本人カップルとわたしがメンバー。いろんな機材を背負って、海へジャポン。

ジャポン。
までは良かったけれども。
ガイドさんに
「じゃ、３０分いきまーす！」
って、言われた瞬間。
パニック。
「無理です！」
即答。
ガイドさん、私の近くまでやってきて
「わたしの目を見て」
と、言うので見ると

「大丈夫」
そして、笑顔。
これが、きっと彼女のテクニックというものでしょうね。
無理と、思えたけれども、、、
お恥ずかしながら、パニックにもなりましたが、、、
あの笑顔＋大丈夫効果でずぶずぶずぶ潜って行く事ができました。
正直、これもまた怖かった。
海の中に３０分潜っているなんて、陸上で生活している人間にとっては本当はありえないことです。
でも、潜ってみるとそこは青の世界。
ブクブクと、わたしの呼吸が海の中で泡になるその青の世界にうっとり。
一瞬、パニックになったけど。
潜ってみると、やはり素晴らしい。
遠くの方でクジラの歌声が聞こえてきました。
うぉーーーーん。ぐぉーーーーん。って歌ってました。海の中で聞こえてくる音は、とても神秘的。私もクジラの歌声に答えるべく真似てみたけどクジラには出会う事ができませんでした。少し、残念。
でも、タートルタウンというカメの町ではたくさんのカメに遭遇。
カメにあっても絶対触ってはいけないとのこと。法律で厳しく取り締まりがあるということと。意外にもカメはあごの力が非常に強くて、噛まれると指がなくなってしまうこともあるとか。そう聞くと、カメが逞しい動物に見えてきまし

た。知らない事は、本当にたくさんあるなあ。しみじみ。

海の中は、とてもいいものでした。そして、なんだかとってもスッキリした気分になれました。

そんなこんなで、あっという間にマウイの旅も終わって日本に無事帰宅。
しばらくは、時差ぼけで朝4時に目が覚めてなんだか早起きができて得した気分。

なんでも
行ってみて
やってみて
感じてみる

そんなことが、生きている。
って、ことかもしれないなあ。

何を感じて
何を思うか
と、いうのが私の個性なんだろうなあ。。。

意外と自分を知らないものなんだなあ。
なんて、思いました。

マウイの旅で知ったのは
私は臆病ということ。
良い言い方をするなら慎重派。
でも、慎重派なわりにはやってみないとわからない性質。

なるほどね！
これで、また一つ自分のことを知る事できました。

めでたし。
めでたし。

初個展をした

いつかしよう。
と、思っていた事の一つ。
個展。

いつかしよう。
を、今しよう。
それが、もしかすると「例えば2年の命プロジェクト」のテーマなのかもしれない。
そんなことに、薄々気がついてきたその頃のわたし。

そんな時に、友達から個展のお知らせ。早速、個展に行ってみる。そこは、カフェだった。いわゆる、カフェギャラリー。
初めてする個展には、いいのかも？
そう思って、友達にオーナーを紹介してもらいギャラリーを借りる為の内容を確認してその日に早速予約。
決めると、話は早かった。半年後に開催決定！
やる。
って決めるだけのことだったんだな。なんて、しみじみ実感。

やることが決まったら、開催するまでの段取りが見えてきた。
まず、作品を作る。案内のハガキを作る。作品を額装する。搬入する。やることが、決まったら忙しくなった。
毎日、版画を刷った。
ランチタイムも頭の中は作品のことでいっぱい。ワクワクしていた。私にとって版画を刷るのは自分を知る作業の一つ。
この時、出来上がった作品を見るとよくわかる。その頃の自分の雰囲気が。とても、内省的な感じのする暗い作品。
なるほどね。作品を見る事で客観的に自分を分析できるのは、一つの技術かもしれないな。なんて、思う。意外と、自分のことってわかっていないことに改めて気がつく。自分のことが、これだけわかっていない。
そんなことに気がつくと、他人のことはもっとわからないものなんだって理解できる。
ふむふむ。

初個展。
初めてポストカードを作ったのが嬉しかった。自分の作品が印刷されてポストカードになっていることに軽く感動して、知っている人に出しまくってしまった。
故郷の友達にまで送った。

まさか、来るとは思わなかった。

信じられない事に。

ありがたい事に、静岡県から友達がやってきた。お知らせするということは、こういうことに繋がってしまうんだ。
と、実感した。

もう一つのまさか！は
売れるとは思っていなかった。個展だから、作品をならべて恐れ多くも値段をつけてみた。

そうしたら、信じられない事に作品が売れてしまった。
友達のお父さん、お母さんがやってきて作品を一つ買ってくれた。そして、職場の友達も買ってくれた。
個展して、値段をつけるということは売るということに繋がってしまうんだ。って思った。

そして、友達のお父さんやお母さん、友達が買ってくれるというのは単純にそれは、私への応援にすぎない。と、思った。

なんだか、有り難すぎてなんて言ったらいいのかわからなかった。
ありがとうございます。
以上の言葉ってなかなか無いものなんだってことを、知った。

初個展をしてみて知ったことは、そんなことだった。知った気になっていることと、本当に知っている事の差は案外大きいもの。そして、知らない事を知らなければそれは一生知る事はできない。なんてことを思った。

なんでも、やってみるのがいいかもしれない。
そうすることで、知らない事を知っていくんだな。きっと。
あとは
やる。
って決めるだけでできることが意外とたくさんあるもんだってことを実感した。

ふむふむ。

フランス旅行の巻

憧れのフランス旅行をした。憧れのフランスには私の人生師匠リチャードが住んでいた。リチャード宅に泊まりながらのフランス旅行。

リチャードというのは、私が人生初の海外オーストラリアに行った時にできた友達。あの時も、はじめての海外なのにワーキングホリデーという制度を使って一年間オーストラリアに住んだ。初めての海外だったけれども、決めて行ったのは一泊分のホテルだけ。飛行機のチケットも片道航空券。なんだか、それがカッコいい感じがしたから。そのオーストラリアで着いた初日に出会ったのがリチャードだった。リチャードはオーストラリア人の友達チャーリーの友達で、当時オーストラリアに住んでいた。オーストラリアに着いたら、リチャードに電話してみるといいよ。なんて、チャーリーが言うものだから素直に電話をかけてみた。その電話が、わたしとリチャードの出会い。それから、本当に良い友達になった。

リチャードは私より多分30歳くらいは年上。とても頭の良い人で5カ国語がペラペラ。他にしゃべれる言葉は数十カ国語。何を聞いても、丁寧に答えてくれる人だった。大学はなぜか京都大学をでていた。ちなみに、リチャードが日本に住んでいた時はアメリカドルが1ドル三百八十円とかそんな時代。ずいぶん、昔。

まあそんなわけで、日本語は達者。だから、友達になれたんだと思う。リチャードは色んなことを教えてくれた。どんな質問にも丁寧に答えてくれる人だった。

例えば、両性具有の人に会った事がある？
とか。
オーストラリアの空が、とても青いのはなんで？
とか。
目と目があっただけで、恋に落ちる事は可能か？
とか。
自分の経験値で丁寧に答えてくれる人。それが、リチャードだった。リチャードについて語りだすとキリがないからこのへんで。
とにかく、リチャードがいるパリに7日間お泊まり。7日間だけだったけど、大好きな人生の師匠のところに泊まれて幸せだった。そして、やりたいことリストの一つ。
フランスのギャラリーへの売り込み。
なんていうのもしてみた。
パリに着いて、へええええって感心した事。

パリの人たちは、人生を謳歌している感じがビンビン伝わってきたこと。
それは、セーヌ川をリチャードとリチャードの奥さんジェニーと散歩に出かけた時。セーヌ川のほとりに小さな半円の遊歩道が連なっていて、そこを取り囲むような感じの階段があった。
それがいくつも、いくつも連なっていた。ちょうどそれは、ちょっとした野外ステージみたいな風貌。

そこで、いろんな人がいろんな踊りを楽しんでいた。
その半円ごとに、タンゴとかサルサとか、フォークダンスみたいなものとか。とにかく、踊りを楽しんでいる人が老若男女入り交じってそのセーヌ川のほとりで踊っていた。
リチャードにいつもこんな感じなの？
と、聞くと
そうだね。
との答え。そして、気楽にピクニックしているひとも多かった。それこそ、ワインと、チーズと、バケットと、友達。
と、いう感じ。私が行ったのは、ちょうど7月。陽が長くて、8時でもとても明るかった。楽しく暮らすって、すぐそばでちょこっと出掛けてできる事なのかもしれないな。なんて、思った。
歌ったり、踊ったり、食べたり、飲んだり、おしゃべりしたり。そんなことが、普通に生活の中にあるのが豊かなことなのかもしれない。
ふむふむ。
リチャードに世界一美味しいジェラート屋とかパリの老舗デパートとか、いろんな場所に案内してもらった。世界一美味しいジェラート屋のジェラートは果物以上に果物な感じのジェラートだったし、老舗デパートはエスカレーターが木でできていたりした。
お泊まりさせてもらったリチャードの家は、古い石造りのアパートだった。映画に出てくるような螺旋階段をのぼって部屋に行くのだった。

場所はメトロの駅を出てすぐ近くの場所。
アパートメントの家の前は広場になっていて、その広場では毎週月・水・金曜日の朝にマルシェっていう市場ができた。
それは、楽しい場所だった。
そして、パンは毎日パン屋に買いに行くのだった。きちんとした朝に。

お泊まりさせてもらっていた間は、私がパン屋にパンを買いに行く係にしてもらった。フランス語なんてしゃべれなくても、ちゃんとパンを買う事ができた。

フランス語の極意はリチャードの友達で画家の正子さんに教えてもらった。

なんでも欲しいもの指さして、

「新聞くれ」

って、言うと通じるから。
あとは

ボンジュール！

って、言うより

「ポンジュース」

って言った方が通じるからね。

と、いうわけでフランス滞在は

新聞くれ
と
ポンジュース

で、乗り切ったといって過言ではない感じ。
パンは本当にびっくりするほど美味しかった。
さすが！
おフランス！

短い間だったけれど、ちょっとフランス暮らしを味わって本当に楽しかった。

そして、やってみました。
ギャラリーに売り込み。

もちろん、一人で。
ギャラリーが多い場所をリチャードに教えてもらって、なんとかバスに乗って。

初めて叩いたギャラリーの扉は今でも覚えている。
普通のドアを3倍くらい大きくした木のドア。深い彫刻が施されているドアで、その前に立っているだけでなんだか
「無理」
って、思えるような重厚感たっぷりの扉。
この扉の前で、私は立ちすくむっていう表現の見本みたいに立ちすくんでいたと思う。
正直、心の声が大騒ぎしてた。

無理だよ・・・
とか
フランスで売り込みでしょ！
とか

もう少し、ライトなドアのギャラリーから行くべし！
とか
とにかく、入ってしまえ！
とか

いろんな心の声が、ぐるぐるぐるぐる。
で、結局のところ
後押ししてくれた言葉は、もちろん

例えば、２年の命。

行くしかないでしょ。
もう、命は限られているのだから。
２度と同じシチュエーションはないと思え、ホトトギス。

えいや。
と、扉を開け

恐る恐る言ってみました

「ボンジュース！」

あとは、身振り手振りで作品を見てくれないか？
的なジェスチャー。

フランス語で何やらいろいろ言ってくれているのだけれども、意味がわからない。
でも、重厚感あふれるギャラリーの方は意外に真剣に見てくれた。
それだけで、嬉しかった。
何やら、アドバイスをしていただいているようだったけれども本当に言葉がわからず。。。
でも、それでもなんだか嬉しかった。
あの扉を押せた自分が嬉しかったし、誇らしかった。
最後に言われた言葉だけ理解できた。

グッドラック！

扉が目の前にあったなら

何も考えずに
開けてみよう、ホトトギス

そのあとも、調子こいてギャラリー売り込み巡りをした。全く、作品を見てくれない人もいたし。名刺をくれた人もいたし、置いてくれる的なことを英語で言ってくれた人もいたし、いくらなの？って具体的に聞いてくれた人もいた。

そんなわけで、初の売り込み作戦は終了した。

売り込みには
新聞くれ
と
ポンジュース
だけでは通用しなかったけれども。。。

それでも、あの扉を開ける事ができただけでその時の私は大満足だった。

あのドキドキ感。
忘れられない感情のひとつ。

生きている間は、いろんな感情を感じて生きていこう。
その感情の幅みたいなものが、もしかしたら私の幅みたいななのかもしれないよね。

ドキドキするとか
わくわくするとか
ムカムカするとか
イライラするとか
ざわざわするとか

いろんな感情があるけど、同じドキドキでも
恋愛のドキドキと
新しいことをはじめるドキドキは色が違う。

改めて思う。

出来る限りの事はしよう。
って。

ほんの束の間のフランス旅行だったけど、行って本当によかった。
行かなきゃ、やらなきゃわからない事ばかり。

行ったことがない場所がある幸せ。
わからない事がある幸せ。
そういう、足らない幸せみたいなものがあって良かったな。

ふむふむ。

それにしても、フランスは日本と全く違う国だったなあ。
スーパーに行って、ビックリしたのは蜂蜜だけで数十種類あるってこと。チーズだって、何十種類もあった。
正子さんが言っていたけど、フランスは自給率120％。その豊かさみたいなものがスーパーにも、マルシェにもあってすごく羨ましい感じがした。
そして、その豊かさと同じくらい暮らしぶりも豊かに感じた。パンは毎日、買いに行くものだから防腐剤なんてものは入っていないんだって。
正しいパン屋さんは正しいお客様によって成り立つもんなんだなあ。

そう。
リチャードの経験によると
目と目があった瞬間に恋に落ちることは可能だった。
とのこと。（おフランスでは）
恋愛成熟度が高いフランスでは、そういう経験もしたよ。って、話をした。
アジアではなかなか無理だったけどね。（注釈）

ふむふむ。

いろんな国があるっていうのも、楽しいことだね。
ちなみに、私が滞在していた7日間の中ではそういう経験ができなかったなあ。

母、文子の人工膝手術の巻

うちのお母さん、文子さんはちょっとした肥満体型である。ずっと、会社勤めの社会人寮の寮母さんをして、私と弟を育てた。寮母さんの仕事は、毎日の朝食と、夕食作りとお風呂掃除など。

とにかく、立ち仕事。

立ち仕事がいけなかったのか、太っていたのがいけなかったのか。多分、両方がうまい具合にいけなかったのだろう。足を悪くした。小さな町のお医者さんは、

「膝に水がたまった。」

と、言えば膝の水をぬいた。

そして

「痛い。」

と、言えば、ステロイド系の注射をがんがん打ったという。

はじめは、それが効いていたらしい。けれども、20年間ほどそんな生活を繰り返していたら、だんだん水を抜いても、痛い。注射を打っても、痛い。お医者さんに行く間隔も短くなり、足がボロボロになってきた。

そして、とうとう人工膝をいれなくてはならなくなった文子さん。

ああ、その前にその町医者で手術も何度かしたんだっけ。
一番ひどかった手術は、膝と膝の間に骨のかけらがあるとかないとかで手術。
手術したけれども、骨のかけらが見当たらず。びっくりすることにそのお医者さんはボロボロになった半月板をとってしまった。それは、骨と骨の間にあるなけなしのクッションだったわけで、それをとってしまったらクッションがなくて骨と骨がぶつかる状態。私ですら、痛そう。って理解できる。そんなこんなで、いよいよ痛くて歩けなくなってしまった文子さん。
手術のあとは過酷にボロボロの足になってしまった母、文子さん。

歩けなくなって仕事も辞めたというのに、
「病院にいくと、あの先生が可哀想。手の施しようもない、お母さんの足をみるのは酷だよね。」
なんて、言っていた。
はっきり言って、お人好しだと思う。
結局、そこまでボロボロになったのは、しっかり自分が足の治療について調べなかったからだ。なんて、言い出した。まあ、それも一理ある。自分の身体というのは、かけがえのない財産なんだから。
でも、人はうっかり、自分の身体って粗末に扱ってしまいがち。そういうのも、わかる。

そうして、とうとう人工膝を入れる他、手が打てない事になった文子さんは、ようやく良い病院を探した。探せば、自分が納得できる病院にも出合えるものである。

求めよ、さらば与えられん。
尋ねよ、さらば見出さん。
門を叩け、さらば開かれん。

まあ、そういうことなのである。

と、いうわけで文子、納得の病院を探し出した。
その病院は東京にあった。
そして、足を診てもらう事に。

初めて探して行った、東京の大病院。人工膝手術で有名な先生は
「よくもまあ、ここまでボロボロになりましたね」
なんて、言った。人工膝を入れる手術することは決定的。
文子さんとしては、両足を一気に手術してもらいたいと思ったけれども、あまりにも酷い状態なので、片足ずつの手術をすることに。
そんなわけで、東京で手術することになった文子さん。
これは、絶好の親孝行のチャンス！

とばかりに毎日、時間が許す限り病院通いをした。
すごく、親孝行的な感じ。

そんな気がするけれども、病院に通うにつれ病院通いが楽しくて仕方なくなってしまった私。

ちょっと、しょうがないなあ。
って、思っちゃうけれども。そこには、入院している人の数だけのリアルな家族像があってそれを観察するのが興味深かった。
お金持ちの人。
ちょっと見栄っ張りな人。
家族がとても仲のよい人。
お嬢様育ちのおばさま。
いろんな人が入院してた。
なかでも、特に覚えている人は
悪い人に会った事がないと、いうおばさん。
このおばさんには驚いた。
だって、このおばさんを前にするとみんな本当にいい人になっちゃう。意地悪で有名だった看護婦さん「クレオパトラ」ですら、このおばさんの前では優しい「クレオパトラ」になってしまう。

こういう人っているんだね。このおばさんに会って思ったのは、人はいろんな引き出しをもっているんだってこと。どんな人にも、優しい気持ちの引き出し、怒りんぼうな引き出し、ケチな引き出し親切な引き出しなどなど。いろんな引き出しがあって、その引き出しを引き出すのは意外にも自分なのかもしれないってこと。まあ、軽く押せば引き出せちゃう引き出しと、なかなか重くて引き出せない引き出しというものがあるのだろうけれども。

ふむふむ。

そう。このおばさん、入院中にはじめて少し嫌な気分を味わったとの事。
隣ベッドの人が具合悪そうだったから、代わりにナースコール押したら、人生初！人様に怒鳴られたとのこと。怒鳴ったのはもちろん、看護婦さん。
初めてのことにかなり動揺していた模様。

いろんな人がいるものです。年齢50歳を過ぎて初めて人様に怒鳴られる人。
そんな、人もこの世の中にはいるんだなあ。

ふむふむ。

そう！肝心の母、文子さんの手術はおかげさまで成功。ただ、もの凄く痛かったらしく手術した後は悶絶してました。

その横で私は、毎日どうしようもない程度のおもしろ話をしてました。

結局、親孝行なんていうのは自己満足でしかないのかも。
あと2年の命だとしたら、お母さんと会って話をできる時間というのも限られた時間なのだな。
なんて、ふと思ったりもした。

限られた時間。
あと、何回会って話をすることができるのかな。
なんて、思ったらちょっぴりセンチメンタル気分になってしまいました。
結局、今を大事にするしかないんだな。

ふむふむ。

残りの命、あと一年

そうこうするちに、残りの命が一年になりました。
つまり、例えば2年の命プロジェクトから一年が経とうとしていたわけです。

さて、問題です。

残りの命が一年になったら、あなたは仕事はしますか？

わたしの答え。

しない。

ああ。
もう。
面倒くさいな。
でも、辞めるしかないよなあ。

なんて思う自分も確かにいました。

こういう時、少しは自分のなかで葛藤するわけです。

辞めないやり方もあるのではないの？
とか
身体、元気だったら余命があと一年でも働いちゃうんじゃないの？
とか
お金はどうするの？
とか
そこまでしなくても、いいのではないの？
とか

今までの生活を変えない方向での心の声みたいなものが大騒ぎします。
ま、そんなには潔くないわけです。

高校生からバイトで働きはじめた私。
働くという意味ではもっと前から働いていたのかもしれない。

臨時のお小遣いが必要になったら、お母さんにお手伝いと引き換えにお小遣いをもらったりしてたし。家が寮だったから、寮で出るゴミのビンを家の前にある商店に持って行ってお小遣いを稼いでいたりもしたから。
そうそう。昔はコカコーラとかスプライトとかはビンだったんです。その空きビンを店に持ってくと1個につき10円とかのキャッシュバック制度とかあったわけです。
懐かしいなあ。

ま、何が言いたいかというと、働き癖みたいものが私に染み付いちゃっているということ。

高校まではお母さんに出してもらっていたけど、そのあとの専門学校とかは、新聞配達なんかしちゃったりして行ったものですから、働き癖はしっかりじっとりと染み付いてしまっているわけです。

そういう、働き癖がついている自分にとっては、仕事を辞めるというのはハードルが高いことの一つだったのは間違いない。

答えはきちんと、出ているのだけれども
今までの、わたしが邪魔をするわけです。

でも、あと残りの命は一年。

本気でそう思ったら、辞めるしかない。

潔く
辞めてしまおう
ホトトギス

と、決意。
その決意表明として閃いたのが

坊主になる！

と、いうこと。
なんて、良いアイデアなのでしょう！
だって、坊主になったら気分的にスッキリするはず！
そして、なにより働こうとする働き癖にも抑止効果がでることが予想される！
これぞ！
一石二鳥！

女子だったら、一度はしてみたい髪型。
それは、坊主。

顔を洗うついでに頭も洗える！
やってみたいなあ。

髪質が変わる！
と、いう噂もある。
本当かなあ。
試してみたいなあ。

急に、ワクワクしてきてしまった私。
せっかく、坊主になるのなら

断髪式
してしまおう
ホトトギス

友達を呼んで、髪を落としてもらって、坊主になる。

いいかも。
いいかも。

まず、必要なモノはバリカン！

決めてしまうと、必要なモノが見えてきて
イメージが膨らんで段取りが決まってくる。

まず、決めちゃう。
っていうのが基本だな。

ふむふむ。

断髪式

残りの命が一年になったところで、覚悟を決め仕事を辞める段取りをした。

そして、断髪式の用意。
式というのは儀式。
どんな儀式、流れにしようかな。
こういうオリジナルな儀式を作るのって、意外と面白い。
そんな事を感じた、断髪式。

まあ。人前結婚式と同じで、皆様の前で残りの命が一年になったことを報告し
一年間は働かないぞ！
と、いう決意表明する儀式。
私の断髪式はそんな位置づけかな。

場所は私が住んでいるお家の屋上に決定。
やはり、儀式ですからね。

正装ということで着物を着たほうがいい感じよね。
坊主になるわけだから、美容院で髪を切る時にまかれるマントみたいなものも必要だな。

ああ。
垂れ幕もあると、いいね。

坊主になったあとは、シャンパンで乾杯だな。

ふむふむ。

なんとなく、したいことのイメージがつかめた私。
ちょうどこの頃、母
文子が入院中。
マントは、文子さんに作ってもらおう。
入院してると暇そうだもんね。

そんなわけで母、文子に事の流れをさっくり説明。
仕事やめて、その抑止案として坊主になる旨を伝えると

バカ笑い。

あんたって子は、面白いねえ。
坊主になるって？
おかしいねえ。

って、概ね賛成のご様子。
と、いうわけでてるてる坊主型のマント作成をさっくり引き受けてくれた。

残念ながら、断髪式には欠席だけれども。

あとは、友達に連絡をして断髪式参列のお誘い。

着付けも友達にお願い。
今回、神聖な役割のバリカンは購入。
垂れ幕は、墨でわたしが
えいや！
と、気合いを入れて作成。

シャンパンも購入。
てるてる坊主型マントも出来上がった。

そして、仕事を辞めたその週末に断髪式決行。

季節は、ちょうど銀杏が黄色に色づく季節。
ちょうど、一年前に引っ越ししてきた季節。

どしん。
と、いきなり
例えば2年の命
と、いうお題を三〇三号室から頂いて一年。

ふううううう。
なんとか、一年が終わりました。
もう、一年は働きませんぞ！
覚悟を新たに。

当日、親友の奈緒ちゃんが必死に説得。
女は髪が命よ！
そんな、坊主なんて断固反対！
そういう、趣旨だったと思う。
今なら、まだ大丈夫だから坊主なんて止めて。
と、一生懸命に説得してくれた。

気持ちはありがたい。
奈緒ちゃんのいい分も、充分によく理解できる。

だけど、こんなに面白いことはなかなか出来ないよ。
今しかできないかもしれない。
それに、髪の毛はまた生えてくるんだよ。もし、これが二度と生えてこなかったら私も考えるけどさ。まだ、髪を再生させる力は私にはあるんだからね。
だから、大丈夫だよ。
奈緒ちゃん、やらせて。
坊主。

なんて、ギリギリまで討論会。
そして、しぶしぶ奈緒ちゃんは断髪式参加。
なんだか、平和な討論会。平和な友情。平和な断髪式。

いや～、面白かった。
断髪式。
坊主って、さっくり出来るものだって思うでしょう？

できないの。
意外と手間がかかるものだったの。

あと
さあ、髪を切ってくれたまえ
友人たちよ！
と、いう時になったら
なかなか、皆さんできないのね。
お先にどうぞ。
いやいや、貴方から。

なんて、譲り合ったりしちゃってさ。

結局、男の山ちゃんが仕切ってくれて坊主に。
まず、ハサミで髪の毛を短くして
それから、バリカンでしたね。

皆様が見守るなか、手先の器用な山ちゃんが
一生懸命に私の頭を坊主にしてくれました。

めでたし。
めでたし。

そして、坊主頭が完成しシャンパンを
ポン！

開けたはいいけれども、皆様お酒はほとんど飲まない方ばかり。
ま。
初めての断髪式ですもの。

こんなものでしょう。

坊主頭。

すごく、新鮮でした。

参列してくれた友達から帽子をいただきましたが
坊主頭が嬉しくて、帽子をかぶっていられない心境。

私にとって坊主頭は、本当に新鮮だったな。
タオルを坊主頭にむけて投げると頭がひっかかってタオルにて釣られる女、状態。
坊主頭の釣りごっこができる感じ。
また、Tシャツを着るときも頭が引っかかって着るのが困難。
Tシャツと坊主頭はちょうどマジックテープのような間柄になっちゃうんだ！
なんてことも、知った。
実体験はとっても印象深いものなんだなあ。
なんて、のんきに思った。
百聞は一見にしかず。
まさに、そんな感じ。

やってみたかった、洗顔ついでに洗髪も気持ちいいったらなかったし。
石けんを顔から頭にかけて、ゴシゴシ。
気持ちいい。

そう！
一番、びっくりしたのが坊主になって
色気ムンムンしちゃったこと。

頭から、色気が立ち上っている感じが自分でもわかるくらい。
色気がムンムンしてました。
個人的にそう感じてただけかもしれないけれども。

そして、坊主以上に無防備な髪型ってないなあ。
って、感じた。
色気は無防備でつくられる。
のかもしれない。。。

ふむふむ。

今後の参考としておこう。
無防備感を感じたのは、頭に突き刺さる太陽光線から。季節は秋から冬にむかう季節だというのに、日光が頭をがんがん照らしてくるのをひしひしと感じた。
そっかあ。
髪の毛は、きちんと頭を守るという偉大な仕事をしてくれていたんだね。

ふむふむ。

知らず知らず、髪の毛は日光から頭を守ってくれていたんだね。
なんだか、しみじみしちゃうな。
身体は、頼んでいないのにも関わらず、健気に役割をきちんと果たしてくれている。
感心。感心。

そうだよね。
寝ている間だって、身体の細胞はきちんとした呼吸を促し働いているわけだし。
自分の身体だけれども、なんだかご苦労様。

そんな、気持ちになってしまった。

集まってくれた友達にも、感謝。
こうして、ステキな儀式ができたのは皆様のおかげです！

ありがとうございます。

そして、断髪式の次の日に母のところへお見舞い。

坊主頭をみて、大喜びの母。
うひゃうひゃ
うひゃうひゃ
笑ってた。ここで、一句。

母親に　笑いを提供できる　孝行娘

母と同室の皆様も
カッコいいね。

と、おっしゃってくれました。

ふむふむ。

髪の毛なんて、生えてくるものだから
人生のなかで、一度くらい坊主にしてもいいものだね。

思った以上に、気分爽快。
閃きに乾杯！

あゆちゃんと四国旅

高校時代の親友、あゆちゃん。あゆちゃんを唆して、四国旅をした。
もし、私が男だったら恋人にしたい人。
それが、あゆちゃんだった。
とてつもなく、繊細で優しくて可愛い人。
でも、とてつもなく繊細だから時々、電話かけても電話をとってくれなかったりする。それが、あゆちゃん。
そのあゆちゃんにもの凄い熱意をこめて、四国旅に誘った。
あゆちゃんは

なぜ？四国？
と、聞いた。

本物の讃岐うどんが、食べたいから。

なんとか、説得成功。
今、考えるとあゆちゃんには本当に申し訳なかったなあと反省する点が多々ある旅だった。

車で静岡から四国までの旅だったけれども、運転は全てあゆちゃん。思いっきりペーパードライバーだった私は運転ができなかった。出発地点が静岡なのは、少しの間だけ静岡の実家に帰っていたから。一応、母文子の様子みるため。だった気がする。とにかく、運転は全てあゆちゃんがした。私はとりあえず、運転しているあゆちゃんの隣では絶対眠りこけないのが唯一、できることだった。

この旅が少し過酷だったのは、全て下道。高速なし。そういう内容の旅だったから。多分、7日から9日間かけての旅だった。そして、お泊まりは車内泊。
まだ、その当時はエコノミー症候群なんて言葉も知らなかった。
よくもまあ。
毎日、車の中で寝たものだ。
そして、よくもまあ。
無事に旅をすることが出来たものだ。

あゆちゃんとの四国旅は本当に楽しかった。
四国まで、たくさんの道の駅に寄ったし道中の名物をよく食べた。

いつも、車の中には食べ物があった。
これが美味い。

これはイマイチかな。
なんて言いながらのドライブは本当にたわいもなく楽しかった。

その道中で食べたモノで、あれは美味かったなあ。って、思うものに
ごま豆腐がある。
手作りのごま豆腐だったと思う。
和歌山県高野山の近くにあった道の駅で買った。あのごま豆腐が今でも忘れられないくらい美味かった。だから、今でもスーパーで見かけるとついつい買ってしまうのが、ごま豆腐。だけど、あの時のあのごま豆腐を超えるごま豆腐にはずっとあえていない。

私が、思ったのは
また帰り道でも、しこたま買って食べよう。
だった。
だけれども、その思いは叶わず。
帰り道は夜で、気がついたらその場所は通過していた。たぶん、道も違う道だったかもしれない。

この四国旅で痛感したことの一つ。
また、後で寄れるだろう。

と、いうのはあまりあてにはならないこと。
引き返すことはなかなか出来ないし、タイミングもあるから。
でも、だからこそ旅は素晴らしいものだといえるのかもしれない。

本当に、気ままな車の旅だった。
ここら辺で、今日は泊まりますか。
なんて、言って車の中で寝床を用意。よく話をして、笑って、さっくり寝た。

あゆちゃんも私も、食べる事が大好きだった。地図を見ては、ここではあれを食べよう。ここに寄ろう。なんて、とめどめもなく話をした。そして、夜は温泉に浸かりに行った。毎日、どこかの温泉に入った。温泉で温まってから車で寝床を作って寝た。
そういう、気ままな旅だった。

念願の讃岐うどんの本場、香川に入った。
昔、香川県の友達にいかに香川のうどんは安くて美味いか。
について、かなり聞き込んでいた。
やはり、話に聞いていたとおりに美味かった。
朝からやっている事に驚いたし、安さと美味さにも驚いた。

いろんなタイプのうどんを食べにいったけれども、香川のうどん屋はなんだか宝探しみたいな感じだった。
看板がなくて、目印は鯉のぼりとか。青い屋根とか。
そんなのが多かった。

そして、変な場所に建っていたりするのが意外にも有名店だったりした。
どのうどんも素晴らしく美味しかった。
今まで食べてきたうどんとは全く違う代物で、香川のうどんは初々しくてピカピカしていた。

私、うまれてきたばかりのうどんなの。
なんて、呟いているようなそんな初々しい感じのピカピカつるつるうどん。

わざわざ、食べにきて良かった。
そう思えるうどんだった。

中でも、一番覚えているうどん屋さんは
青い屋根が目印のうどん屋。
奥でうどんを打っているご主人の背骨がうどんを打つ姿勢のまま曲がっている姿に驚いた。
あれがプロ根性。みたいなものかな。

言い方悪いけど、せむしという風情のご主人。
あんなにも、腰が曲がっていたらなんとなく悲壮感みたいなものってあると思うんだけど、そのご主人には悲壮感なんてなくて。。。
なんだろう、うどんに対する本気が伝わってきてちょっと感動した。
うどんを打ちすぎて腰が曲がったようにみえたから。
もちろん、うどんももの凄く美味しかった。

うどんについても、あゆちゃんとどこのうどんが一番美味かったか。とか、そんな話をしてずっと楽しかった。
麺の一番はあそこで、汁の一番はあのうどん屋が美味かったね。いやいや、あそこも良かったけどあの店も素晴らしかったよ。なんて、話はずっとしていることができる話題だった。とても、平和な話題。

せっかく、四国まで来たのだから四国を一周しよう！
と、言って四国を一周した。
途中、パリで友達になった画家の正子さんが愛媛に帰っているということだったから、正子さんのところに寄って泊めてもらったりした。
そして、おススメの温泉を紹介してもらって一緒に行ったりした。

そうして、気ままに気楽に四国を一周した。

毎日、どこかで温泉に入っていた私たち。
お肌はつるつるのピカピカ。
やはり、温泉は肌によいものなんだね。
って、実感した。

そう。温泉で面白かったのは、わたしの髪型が坊主だったから女風呂に入るとびっくりされたこと。おばあさんなんかは、固まってしまってたりした。だから、脱衣所に入ったら急いで裸にならなくてはいけなかった。女ですって、無言の証明を裸でしなくてはならなかったのである。坊主も、少し伸びるとはっきり言ってフェロモンなんかはすっかり消え失せて、ただの中学生の坊ずみたいになってしまっていた。

ふむふむ。

毎日、いろんな温泉に入っているとわかる事がでてきた。
それは、パワフルな温泉とそうでもない温泉があるってこと。

一番パワフルだなあって思った温泉は、外観がぱっとしないところだった。隣接している食事処で鰹のタタキを食べた。
だから、高知県だったと思う。

その食事処もぱっとしない風貌だったけれども、こちらの鰹のタタキも鰹がもっちりしてて美味かった。鰹があんなに美味いなんて知らなかった。これまた、人生至上一番美味い鰹のタタキだった。
期待をしていないところで、期待以上のものが出てくると感動があるもの。
なんて、思ったし記憶にきちんと残るものなんだということを改めて知った。
人生至上、一番美味い○○。そういう食べ物って、どのくらいであえるものなんだろう。
そう、考えると私はこの四国旅で人生至上一番美味い
ごま豆腐
鰹のタタキ
そして、つるつるピカピかのうどんに出会う事ができた。
ふむ。
素晴らしいことだ。
そして、人生至上一番パワフルだと感じる温泉にも出会えた。
実に幸せなことだな。
しみじみ。

そう。
そこの温泉の脱衣所は、コインロッカーなんていうオシャレなモノはなくただ脱衣所があった。
小さく区切った木のロッカー。その中に、プラスチックの籠。

人もほとんどいなかった。

服を脱いで温泉へ。
シャワーが4個くらい。6人も入れば満員御礼のお風呂。
お湯が出るところだけ岩で出来ていてニョロニョロとお湯が出ていた。
実にパッとしない雰囲気。
ざざっざーっと、簡単にシャワーを浴びて湯船にぽちゃん。

すると、ぬるり。
とした湯触り。
を感じた。
お湯が身体をそろーって優しく包み込む感じがした。
これこそ、湯触りってものなんだ。
なんて、実感。
正直、ビックリした。
とろとろのお湯。
なんなんだ！？
人生初の湯触りを感じる温泉に遭遇。

なんだか、この温泉
スゴイ。
そんなことをあゆちゃんと話あった。こういう時、一緒に感動を分かち合える人が近くにいるって本当に素晴らしい。
すごいね。
とか
美味しいね。
とか。
そういうことを一緒に共有できるって、なかなかあるものじゃないよね。
って、言い合った。
あゆちゃんが居てこその旅だった。
旅は道連れ。世は情け。っていうけど、
旅は道連れ。
それだけで、素晴らしい。

それにしても、なんだかとってもパワフルな温泉だった。
身体もホカホカしたし。
お肌もつるつるになったし。
疲れまでとれた。

こういう予期しない出会いがあるから旅はいいな。

感動級の温泉だった。
高濃度アルカリ温泉。
って書いてあった気がする。でも、不思議なのは
今、ネットで調べてもどうしてもその温泉が発見できないこと。

そんなわけで、私の中で幻の温泉になった。
あんなに、感動したのだからきちんと名前を書き留めるなりなんなり、すべきたった。と、今頃反省。

あれから、いろんな温泉に入ったけど
あの時の感動を超える温泉にはなかなか、出会えない。

そんなわけで、幻の温泉という引き出しが私の中でまた一つ増えた。

こういう引き出しを一つ一つ、増やして行くのが楽しくていいな。
いつか、また行こう。

死ぬ時は思い出は持って行けるのかなあ。
なんて、思ってしまった。
よく死んだら、お金は持って行けないんだよ。
なんていう話はするけれども。思い出はどうなんだろうねえ。
そもそも、死ぬとどうなっちゃうんだろう。

死ぬのも案外楽しみかもしれない。
どうなるかを知ることができるかも。
生きている人の最後の経験は死ぬ事。なんだよね。うっかり、そんなことに気がついてしまいました。

ふむふむ。

ルームシェア
～肉屋のみさちゃんの巻～

仕事をしていてもいなくても、日々の生活を維持するのはそこそこ大変。
しかも、命の期限は限られているとなったらやりたい事は山積み。
そこで、ルームシェアをしてくれる人を捜した。運命の三〇三号室、ルームシェア1号は肉屋のみさちゃん。
肉屋のみさちゃんは実家が肉屋。だから、肉屋のみさちゃん。
社会人になるまで肉が嫌いで、社会人になって高級肉を食べてから肉が好きになったという肉屋のみさちゃん。

そんな、みさちゃんは一人暮らしを渇望していた。
そんなわけで
まずはルームシェアはいかが？
と、持ちかけた。
条件は忘れてしまったけど、みさちゃんは快諾してくれた。
こうして、みさちゃんとのシェア生活が始まった。半年程度、一緒に暮らしていたと思う。
と、思うというのはどのくらい一緒に暮らしていたのかすっかり、忘れていたのだった。
ああ。

本当に記憶というのは、あっさりと曖昧になっていくものなんだなあ。
と、実感。
みさちゃんの生活で覚えている事を箇条書きにすると。

・セミダブルのベッドで仲良く並んで寝てた事
・犬を撫でている夢をみてて、あまりにもリアルだなーなんて思っていたら、隣で寝ているみさちゃんを撫でていた事
・毎日、トランプの貧民をしてて、みさちゃんが毎回負けていた事
トランプで10連敗したみさちゃんがペナルティーでケーキを買った事
そのケーキは西荻窪にあるフランス語で白桃という意味の店名のものでここのケーキを心から愛していた事

そんな事くらいしか思い出せなかった私。
自分の記憶のしょんぼりさ加減にびっくりして
もの凄ーく久しぶりにみさちゃんに電話をした。
そして、近況報告しつつ事情を説明して覚えている事を教えてもらった。

面白いなーって、思ったのは私が忘れてしまっている事をみさちゃんは覚えているという事。
そうだったっけねー
そんなこともあったっけねー

なんて、昔話に花を咲かせてた。

本当、記憶ってどんどん薄れていく。
だから、生きていく事ができるっていう人もいるけど。
たわいもないけど、忘れたくない話はというのもあって、そういう話はやはり残しておきたいな。
って、しみじみ思った。

みさちゃんの記憶によれば、その頃の私はフランス語の勉強をしていて部屋のあちあらこちらにフランス語タグをつけて暮らしていた。
とのこと。
たぶん、フランス旅行の前だったから少しでも覚えて行こうという努力だったと思う。
毎日、フランス語ラジオを聞いていたけれども。最後のオーヴァ（さよならー）という挨拶でしか反応していなかったと、いうこと。
そして、毎日ごはんを作ってくれたと言っていた。しかも、同じメニューで
その毎日のご飯は
「白インゲン豆のミネストローネ」

いやあ。

すっかり、そんなこと忘れてました。
驚くほど毎日、同じ「白インゲン豆のミネストローネ」を作っていたとは！

そして、わたしの知らなかった事。
みさちゃんは、毎日白インゲン豆のスープを飲んでいたせいか。。。
ある日。
白いうんこ。
が出てビックリしたとのこと。

知らなかったな。
白いうんこの話は。
たぶん、気を使って話さなかったんだなあ。
面目ない。
それにしても。
後で、実はあの時。
みたいな話は意表をつくものなんだなあ。

しみじみ。

なんで、毎日白インゲン豆のスープだったか？
と、いうとダイエット効果があるらしい。
と、本に書いてあったからだったと思う。
みさちゃんはこの時、インゲン豆効果で？とても痩せた。
と、言っていた。
私の記憶に私が痩せた記憶はない。
また、白いうんこも出した記憶もない。
たぶん、私にはそんなに効果がなかったのではないかと思われる。

ふむふむ。

そして、冷蔵庫の上には花が毎日飾られていた。
と、いうことだった。

確かに、毎日花を飾る生活をしていたと思う。
みさちゃん、曰く。

とても平和な毎日だった。

そう。

確かに、平和な毎日だった。

毎日、淡々と暮らしていた。

好きなことをして。

そして、こうして思い起こすに意外と好きな生活というのは毎日の暮らしからそんなに離れていないんだろうなあ。

と、いうこと。

好きに暮らすは気の持ちようで、すぐそばにあるものなんじゃないのかなあ。

って、気がした。

部屋に花を飾ったり、友達と一緒にご飯食べたり、トランプしたり。

散歩に出掛けたり。

季節、季節の匂いをかいだり。

あれしたい。

これしたい。

って、夢見たり。

ふむふむ。

みさちゃんとの暮らしは、本当に平和だったな。
とりたてて、喧嘩もなく。

ただ、寒いある日。お家に帰ったら窓ガラスの枠にガムテープが貼られていたり。
ホットカーペットの下に段ボールが引かれていたりして、それらについてはかなり話し合った気がする。
私としては窓ガラスにガムテープ。
と、いうのはなんだかとても閉じ込められている感じがして気に食わなかったし。みさちゃんとしては少しでも寒い空気を家の中にいれないぞ！
と、いう寒さ対策だったりして。
一緒に生活してみなくては、何を大事にしているかなんてのはわからないものなんだってことを改めて知った。
でも、結局意見を交換して双方の妥協案で平和に暮らす事ができた。
窓ガラスにガムテームは却下となり、ホットカーペットの下の段ボールは採用されたのであった。

平和な議題と平和な討論。

例えば2年の命。

そういう平和の中に、どっぷり浸かって暮らすのも悪くないのかもしれない。
なんて、振り返って思う。

みさちゃんと暮らして約半年後。
さあ、次は一人暮らしするぞ。
お金貯めるぞーって、
みさちゃんは三〇三号室を卒業していった。

三〇三号室からのお題　パート２

坊主になって、あゆちゃんを唆して四国に行って、東京に帰ってきた、ある日。

またしても、お題が。

そう。
三〇三号室からのお題が。
どしん。

新車のホンダ　スーパーカブを買って屋久島に行く

今回は、なんだか知らないけどえらく具体的。

新車のホンダ　スーパーカブを買って屋久島に行く
と、きた。

もちろん、今回だって
えー、働いていないのに新車のカブって。。。
なんで、屋久島？

悶々と、葛藤。
でも、まあ。。。
残りの命は一年なんで
ま。
いっか。
屋久島、一度も行ったことがないしね♪

今回は案外、簡単に受け入れました。
妄想、入っているのかもしれないけれども。
勘違いなのかも、しれないけれども。。。
そんなことを、言い出したら初めからそうなんだから。
もう、これは割り切って受け入れるしかないでしょう。
妄想、だっていいじゃない。
勘違い、だっていいじゃない。

残りの命は1年きってしまったんだから。

ふむ。

この時、思ったのは
お金がない。
って、よく言いますが本当にないのか？
って、こと。

やりたいことがあって、やれるだけのお金があるのに
お金がない。
って、言うよなあ。
私。

うんと、突き詰めると嘘なんだってことがわかったんです。

先々のことを考えるとお金が充分にない。
だけど、今

新車のホンダ　スーパーカブを買って屋久島に行く

それだけのお金はある。
だったら、本当はお金はある。
って、ことになるのではないのかなあ。
なんていうことに、うっかり気がついた私。

なんということでしょう。
そんなわけで、さくっと買いました。
ホンダ　スーパーカブDX 90。
とても地味な話。
私、バイクの小型免許をもっているんです。
なんでか？
と、言いますと車の免許を取得する際に車庫入れが非常に苦手でして。。。
ふと、教習中に横を向いたらバイク。
バイクを見て、あれには車庫入れないじゃない。
って、バイクの免許をとったんです。

でも、小型。
非常にレアな自動二輪小型免許。
もちろん、中型を取りたかったんですよ。だけれども、教習所にて背が小さいとかなんとか、言われてとりあえず小型からとりましょう。
と、言いくるめられてしまったわけです。
ま。
そんなことは、どうでもいいんですけどね。

それで、バイクを買いに行ったらカブは90があったのでためらわず90を選択。
だって、せっかく小型二輪を持っているんですもの。
ここで、使わないでどうする？
って、話です。

しかし、免許取得してから乗っていないんです。ほんの12年ばかしは。。。しかも、カブはスクーターと違っていてクラッチとかあるんです。
スクーター、自転車とはワケがちがうんです。

バイクの乗り方。

なんて、すっかり忘れてます。
もちろんのこと。
クラッチとブレーキがどっちになるかも定かではないんです。
こんな、私がバイクで屋久島へ。

正直、大冒険です。
しかも、自分の中にはハッキリした根拠がないときた。

部屋の三〇三号室が

新車のホンダ　スーパーカブを買って屋久島に行く

って。
どしん。
って。
言葉を感じるなんて、、、

きっと、こんな話をしたら病院行きなのかもしれないです。

わかんないけど結構、立派な病名がつきそう。

でも、私としてはいたってまとも。
と、思っている。これが、一番の問題だ。

ふむふむ。

参っちゃいます。
でも、ハッキリと感じてしまうんだから致し方ない。

そして、よくわからないうちに屋久島までの旅準備をしました。
カブの練習もしたけれども、エンジンをかけるのもままならない。

一度はニュートラルではなく、ギアを1に入れてエンジンをかけてしまいました。
すると、どうなるか？
バイクが暴れ馬のようになり、転倒。
新車なのに早速キズだらけ。。。
新車のバイクに申し訳ない。

でも、なんとか自分は無傷。

そんなこんなで、カブの納品から約10日ほどで出発！
決めたのはルートと期間だけ。
あとは、1泊分のホテルだけ。
期間を決めたのは、船で川崎港から出発して宮崎港へ。
宮崎港から川崎港へ帰ってくる往復切符を買うため。
1泊分のホテルを決めたのはは到着が夕方だったから。

臆病者で慎重派の私にとっては大冒険。

いくつになっても、冒険ってできるものなんだなあ。
ドキドキしたり、わくわくしたり。
まだまだ、初体験って残っているものなんだなあ。
なんて、思いつつ屋久島へ出発したのでした。

春一番が吹いて、屋久島到着

大冒険の屋久島の旅。
宮崎で1泊して、バイクで鹿児島へ。なんとか、バイクで鹿児島に無事到着。屋久島には鹿児島から出ているフェリーで向かう。だから、フェリー乗り場近くのホテルに泊まることにした。案外、全てが順調でびっくり。

次の日の朝いよいよ、屋久島入り。
何の予定もないけど、どうなんだろう。予定のない旅って、なんだかとても自由な感じがする。

屋久島行きのフェリーに乗り込んだその日、春一番が吹いた。

それはそれは、大揺れのフェリー。
乗り物に弱い私は、すっかり船酔い。船酔いしつつも、フェリーの中でゲストハウスのチェック。泊まるところを物色。
目にとまったチラシは「友達を作ろう！　森のひだまり　1泊　千八百円」

これで、いいや。
森のひだまりで、友達作っちゃおう。

なんて、思いつつ船酔いで悶絶。
船の座敷部分で大の字になって寝てみたり。
外の景色を一点集中して見つめてみたり。
どれもこれも、効果がなく。生きた心地がしなかった。
気持ち悪くて、でもどこにも逃げることができない船の旅。船酔いで死にそうだった私。
早く早く屋久島ーーーー。
お願いだから、屋久島ーーーー。
早く陸地を拝みたくて、必死に祈った。

神様、一刻も早く着かせてください。

なんて、必死の祈りもむなしくほぼ定刻通りに到着。

ようやく、船から解放された時はふらふら。陸地に立ってもしばらくは揺れている感じが抜けなかった。
陸地がこんなにも、平和で素敵に思えた事はないかもしれない。川崎港から宮崎港までは大きなフェリーだったせいか
全く揺れず、船酔いとは無縁だったからフェリーを侮っていた。
おそるべし、フェリー。

帰りもこのフェリーに乗るんだと思うと帰るのがいやになるくらいの揺れ方だった。
この時は、春一番が吹いたから揺れたということは知らなかったから、余計そう思ったのかもしれない。
揺れたら揺れたで、その揺れた理由を知っていれば我慢ができることってあると、思う。

さて。
陸地で少し落ち着いて早速ゲストハウス「森のひだまり」へ。
屋久島は1周、約百キロ。バイクでまわるには手頃な大きさの島。ゲストハウスも港からすぐのところだった。森のひだまりは1階はお菓子や食品、キャンプ用品なんかも置いてある売店になっていて、その上に部屋があるというゲストハウスだった。
さて、売店でチェックインしてドミトリーの部屋についてみると。。。

誰も、いない。

むなしく2段ベッドが、いくつもあって部屋の中はまっくら。
そう。この時期、オフシーズンの屋久島。2月下旬だったと思う。
あれれれれ？
友達作ろう　森のひだまり！
じゃなかったのかな？

その暗い部屋の真ん中に机。机の上に1冊のノート。
そう、いわゆる旅ノート。
このノートを広げてみたら、、、

「今日も誰も来なかった。早く誰か来てくれないかな。。。」
「今日も誰も来なかった。今日は売店のおばさんの紹介でタンカン（みかん）の収穫を手伝ってきた。久しぶりに人と話ができて楽しかった。」
「今日も誰も来なかった。だんだん、私の日記帳みたいになってきてしまったこのノート。。。」

なんて、書いてある。そして、このノートを書き綴った人は、いない。
なんだか、とっても寂しげ。そして、私もこのノートを書き綴った人と同じ屋久島旅行になるのか??
なんて思うと、どんよりな気分。
ま。そんなことを言っても仕方ない。荷物を置いて、早速どこかに行くのだ。
売店のおばさんに、相談してみよう。
今からだと、どこがおすすめですか?

バイクがあるなら、
「トローキの滝がいいんじゃない」

と、いうわけでレッツゴー。トローキの滝。
トローキの滝というのは海に直接、滝が落ちる滝でとても珍しいのだとか。目印はポンタン館とのこと。
そのポンタン館から、徒歩で5分くらいの場所よー。って。
ふむふむ。
予定がない時は、誰かにこうしておすすめの場所を聞いてそこに行くのもいいよね。
こうして、考えるとバイクで行って本当に良かった。気軽に動き回れるというのは、すごくいい。

ポンタン館というのは、屋久島の加工品を扱うお土産さんみたいな場所。まず、ここに立ち寄って昼ご飯に「タンカン蒸しパン」とジュースを買った。お店の人にトローキの滝の行き方を軽く聞いて、てくてくと山道に入っていった。

すると、トローキの滝が見れるポイントに到着。そこまでは、なんてことない道だったけど。その先に、獣道みたいな細い道が繋がっている。
ちょっと、行ってみようかなと獣道に進んでみたけど。。。。
目の前が海で、視界には海だけが広がるロケーション。そう、うっかり落ちて行ってしまいそうな危険な獣道。少し、進んでみたけれど慎重派の私。
うむ。
これは、獣道だな。人の進む道ではないね。
と、決断。

トローキの滝はばっちり見えるし、大きな岩があってナイスなロケーション。
ここで、いいや。
ここが、いいや。
って、先ほど買ってきたタンカン蒸しパンを食べていた。
なんだか、知らないけど屋久島まで来ちゃったなあ。。。
なんて、しみじみとタンカン蒸しパンを食べていたら。。。
先ほどの獣道からおじさんがひょっこり、現れた。
あまりの、唐突な出現でビックリした私。
「うわーーー」
って、驚いてしまった。
「おじさん、下に行ってきたの？」
って、聞いたらすっごい笑顔で
「そうだよー、下が素晴らしいんじゃない。」
って。どこからきたの？から始まって、軽く世間話。なんだか、すごく面白いおじさんですっかり意気投合。
おじさんも、三鷹に住んでいたことがあるとか。
屋久島に来たのは、死に場所を探しにきたんだよね。って、話とか。
暗い感じではなくて、すごく明るい調子だからうけてしまった。
死に場所を探しているおじさんと、あと1年の命の私。

共通事項は「死」が身近にあること。
面白い。

「明日、コーヒーでも飲みにきなさいよ。」
って、電話番号をもらった。

「本当に行っちゃいますよ」
なんて、軽口をたたいた私。
「本当に、来ちゃいなさいよ」
と、おじさん。

振り返ってみると、わかる事だけど。
屋久島の旅はこのおじさんこと、佐々木さんと佐々木さんパートナーのタカさんに会いに来た旅。
全くの偶然に出会ったはずなのに、なんだか仕組まれていたかのように出会う人。

そう、次の日コーヒーを飲みに行ったつもりが泊まる事になって、うっかり7日間ほどお世話になってしまった。
予定なんてなかったけれども屋久島から船で一時間半ほどのところにある口永良部にも行って来た。

予定がないという自由な旅。
それは、どこにでも行ける可能性を秘めた旅だった。
ふむふむ。
明日というのは、どこにいてもいいし。
何をしててもいいんだね。

出会いは必然。って、よく言うけど。出会いは必然というより、不思議。
三〇三号室も、不思議。部屋から出るお題を感じる、私も不思議。

なんか知らないけど仕組まれている。
そんな感じがした屋久島の旅。

この世はなんだかワンダーランド

佐々木さんの家にコーヒーを飲みに行った。のは覚えている。
でも、なんで泊まることになったのかは正直覚えてない。
なんだか、自然に泊まることになってお世話になってしまった。私はビックリな展開だったけど、佐々木さんのパートナーであるタカさん曰く。

よく、こうして若い子をつれてくる習性が佐々木さんにはあるのよーって。だから、大丈夫よーって。

ふむふむ。
こんな展開もまあ、いいのかもしれない。
予定のない旅だから。

それに、佐々木さんもタカさんも初めて会ったのに、初めて会った感じはしない。こういう事も世の中にはあるんだね。
まあ、この世はワンダーランド。
そんな風に受け入れた方が楽しいってもんだ。

ふむふむ。

佐々木さんは東京で塾の先生をしていた。それはそれはとても良い先生だったみたい。
沢山の教え子を有名大学に行かせた。
と、言っていたから。
佐々木さんの話で覚えているのは

都会の子を有名大学に入れるのは、もう飽きた。人生の最後は僻地の子供に学力をつけさせて夢を見せたい。
屋久島にいるのはその旅の途中なんだよ。

って、いう話。
屋久島では、お医者さんの娘のサクラちゃんという子を教えているとのことだった。このサクラちゃんを九州の有名高校へ行かせたら、もっと僻地に行く予定なんだ。って、目をキラキラさせて話をしてくれた。

いくつになっても、夢ってあるんだなあ。
夢があるっていうことは、目がキラキラしちゃうことなんだなあ。

ふむふむ。

一方タカさんは料理上手で、もてなし上手。いろんな、技をもっていた。
釣った魚は自家製干物に。ベランダでは水前寺菜という、表が緑で裏が紫の菜葉を育てていた。
料理は何でも美味しかった。
そして、料理する中でゴミをほとんど出さないという技も持っていた。
それが、本当にすごいなあ。って思った。

泊まることになってから
毎日、夜は
次の日、テンコちゃんは何して遊ぶ？
が、テーマだった。
佐々木さんは家庭教師に行くし、タカさんはお仕事をしていたから、日中は専ら一人遊びの時間なのだった。

佐々木さんとタカさんと私とで
次の日、私が何して遊ぶか？を考えるのがすっごく楽しかった。
時間があえば、佐々木さんと釣りに行ったりもしたし
磯遊びもした。
夜は近くの温泉にも行った。

みんな、良い年の大人なのに子供のような話し合いだった。

そして、朝はタカさんとお弁当を作るのだった。
おにぎり、握んなさいよーとか
沢庵、入れた？とか。
卵焼き、作ったよー。とか。
出会って、間もないのに家族みたいな時間。

あの感じはなんなんだろう。
つくづく、不思議。

屋久島に来た理由はこれだ！
って、思えた。
運命の部屋、三〇三号室からのお題は妄想でも、勘違いでもなかったと思えた。
確かに三〇三号室は私にお題を出したんだって、思えた。
その答えがあるような、屋久島の出会い。

ふむふむ。

佐々木さんと魚釣り。

草をかき分け、かき分け進んで行く。佐々木さんが言う

私の前に道はない
私の後ろに道は出来るのだー。わっはっはー

そう言って、向かうは秘密の磯。
断崖絶壁。
落ちたら、助けられないから落ちないでね。

危険と遊びはいつも隣り合わせ。ギリギリの線の上に楽しいということはのっかっている。
ことを改めて思う。

秘密の磯は、危険だけど気持ちよくて海がキラキラ。釣り糸たらして、ボーーッとするには最高のロケーション。
何匹かの魚をゲットして、私も佐々木さんもうほうほ。
魚は新鮮なうちに下ごしらえを磯で行う。

そして、お家に帰ったら早速タカさんが調理してくれて食卓へ。自分で採ってきた魚を食べる喜び。
なんだか、生きているって感じる。生きるのは、命をいただいていくんだってこと。
そんな、当たり前の事を実感。

夜のミーティングで、佐々木さんとタカさんが少し前に住んでいた口永良部の話がでた。
口永良部は屋久島から船で一時間半。
佐々木さんとタカさんが初めて移り住んだ島。

その島は、本当に何もない島で素晴らしいんだよー。また、素晴らしいのは温泉が4種類もある。
乳白色の温泉。赤色の温泉。湯の花が浮かぶ温泉。もう一つは引き潮の時は湯量が変わる温泉。
そんな、話を聞いたら温泉大好きな私は行きたくなっちゃった。

佐々木さんの
素晴らしいんだよー
って、言葉はとっても魅力的。
うっかり、私を行きたくさせちゃう。

きっと、勉強を教える時も

素晴らしいんだよー
知るってことは。
って、教えているんだと思う。
点数をとるという事より、知るということは素晴らしいんだよーって。きっと、そういう先生なんだろうな。

こういう先生に出会える生徒は幸せだね。学ぶということの本質を教えてくれる先生は意外にも非常に少ないから。

ふむふむ。

まあ。
自由な屋久島の旅は、そんなわけで口永良部という島にも私を行かせた。

口永良部への旅はほんの1泊2日だったけど、これまた素晴らしい体験だった。
佐々木さんとタカさんは口永良部に住んでいただけあって、口永良部に何かと詳しい。泊まるところは町営かなんかの宿泊施設を紹介してもらった。1泊六百円とかだった気がする。そして、そこについている温泉への入湯税が二百円で合計で千円いかなかった。と、思う。
こういう場所があるんだねえ。

口永良部に行くなら、鳴子さんに持って行ってもらいたいものがあるわー。ってタカさん。
鳴子おばあさんは、タカさんと佐々木さんが口永良部に住んでいた時に大変お世話になったというおばあさん。すごく、先進的な女性なのよ。って、教えてくれた。ほぼ自給自足的な生活をおくっているのだと言っていた。

次の日、鳴子さんに渡したいものを沢山、バイクに積んで口永良部へ。
人より鹿のほうが数が多い島。口永良部。

鳴子さんの家は、船着き場についたら適当な人に聞けばわかるから。みんなが、知り合いの小さな島。口永良部。

ふむふむ。
口永良部、上陸。
宿泊するところの鍵をもらいに行って、宿泊代を払う。

口永良部は全て、聞いた通りだった。
なんにもないのが素晴らしい島。

鳴子さんの家は、泊まるところの鍵をもらいに行った時に聞いた。
もちろん、すぐわかる場所にあった。みんなが知り合いという雰囲気。

早速、鳴子さんにタカさんから預かった荷物を渡しに行く。すると、
今日は寝待に泊まるんでしょー？
それなら、あそこには誰々さんが住んでいるからこれ持って行ってあげてー
って、自家製野菜を渡された。

ふむふむ。
みんな助け合って生きているのだね。

バイクでぶんぶん。
寝待という場所に、到着。
寝待、時代が違うような雰囲気。浦島太郎が出てきそうな、昔の漁村を彷彿とさせる場所だった。
そして、寝待に続く道は古い雰囲気のコンクリート道。途中、崖崩れのあともあったりした。誰も直そうとしない感じの道で、人口の少なさをひしひし感じる場所。なんにもない。誰もいない。
そんな、圧倒的に現代離れしている場所にカルチャーショック。
宿泊施設は海沿いに建っている小屋、鍵は南京錠。もちろん、木造。玄関を上がると、６畳間。その奥に押し入れ。押し入れの横は雨戸があって、雨戸を開けると縁側。そして、目の前が海だった。
玄関入った右手には、床の間があってそこに古い型の赤い小さなテレビがチョコンって、あった。
なんだか、そのテレビだけが現代と繋がるアイテムのようだった。

そして、トイレは外にあるのだった。もちろん、私の他に泊まっているような人はいなかった。
その小屋の端っこに、家があってそれが鳴子さんから渡された野菜を届ける人が住んでいる場所だった。

こんにちわー。
って、声をかける。
鳴子さんに渡されて持ってきましたー。って、野菜を渡した。
鳴子さん？
野菜を渡した人はいまいち、鳴子さんを認識していないようだった。
でも、ありがとう。って受け取ってくれた。
温泉について聞いたら。
ビックリ仰天。
混浴だった。
一応、坊主頭でも心は乙女の私。混浴に正直、ひるむ。
そうしたら、その人が
夜の十時を過ぎたら誰もこないから大丈夫よー
って、教えてくれた。
それなら、夜十時に入れば大丈夫。

こうして任務完了。

部屋で一息ついていたら、先ほど野菜を渡した人がやってきてタンカンをくれた。そして、電気ストーブを寒いからって貸してくれた。
なんだか、すっかりわらしべ長者の様相。
面白い。

雨戸をあけて海を眺めつつ、ほっと一息。

天気は曇り。
海の音しか聞こえてこない。
人の気配がなく静かな縁側。
そこで、タカさんに作ってもらった弁当を海を見ながら食べた。

思ってもみなかった旅の展開。
まさかの、口永良部上陸。

新車のホンダ　スーパーカブを買って屋久島に行く

と、いうお題は私をこんな時代のはずれみたいな素晴らしい場所まで連れてきた。
この世はなんだか、ミラクルワールド。
明日のことなんてわからない。
どこで、誰に出会うかなんてわからない。
旅に出る前の私は、口永良部という島を知らなかった。佐々木さん、タカさんを知らなかった。
寝待という場所だって知らなかった。
温泉につられて、ここまで来た私。

ミラクルだわー
奇跡だわー
って、海を見ながらつぶやいた。

まさかの、混浴

夜の10時になるまで、部屋でテレビを見て過ごしていた。
時代のはずれのような場所でテレビを見ている私は、テレビを通じて現代に必死に繋がろうとしているエンジニアのよう。テレビをつけないでいると別の時代に連れて行かれそうな、そんな気分。

そうこうしてようやく、10時になった。
お風呂セットをビニール袋に入れて玄関を開けてびっくり。
今まで、体験した事のない闇がそこにはあった。
手を突き出すと、肘から先が見えないような闇。
外に明かりというものが一切ない。
月も、星も、街灯も。あるのは部屋の中の明かりだけ。

さあ、温泉へ♪
そんなルンルン気分を吸い込んで、どこか知らない場所にもっていってしまうようなブラックホールみたいな闇。
そんな闇と対面。

さあ、どうする？
自分と闇の境界線もわからないような闇の中に行けるか？
さてはて、部屋に戻って潔く諦めるか？
明日の朝に入るか？
いつだって、選択を迫られている。

あっちゃー
なんということ。

はっきり言って、もの凄く怖い。自分と闇の境がわからないくらいのブラックホールみたいな闇だったから。
こんな時、私を勇気づけてくれる言葉。
そう、それは。
例えば2年の命。
とほほほほ。
なけなしの勇気を振り絞って、闇の中へ。両手を前に突き出して、盲目になったかのように前に進む。五感が勝手に研ぎすまされて行く。
だけれども、温泉がどこにあるかがわからない。手探りで塀を超えてみたりしたけれども、温泉の場所がわからず。
闇の中で途方にくれる私。

なんで、明るいうちに温泉の場所を確認しておかなかったんだろう。深い後悔。
方向性が見えない中で進むというのは、本当に怖い。明かりがないというのは、身体の芯から心細い。

怖さのあまり、必死に祈っていた。
誰か。
誰か。
誰か、助けて。
私を温泉に連れてってー。
そうしたら。
驚く事に遠くのほうに車のヘッドライト。
祈りが通じてしまった。

でも、車から降りてきたのはおじさん。
懐中電灯を照らしながら向かってくる。
あっちゃちゃー。
混浴が嫌でこの時間まで待ったのに。。。

贅沢は言っていられない。

おじさんに声をかけて、温泉までお供した。
混浴が嫌でこの時間まで待って出てきた事も潔くカミングアウト。
すると、おじさんは
だっから、都会者はわかってねえなあ。
こんな小さな島で悪さしたら、ここには住めないべ。
がははははは―
って。豪快に笑う。
私は引きつって笑う。

とほほほほ。

まあ、そんなわけでこのおじさんと混浴。
確かに、変な事はなかった。
身の危険はなかった。
でも、浦島太郎が出てきそうな時代を彷彿とさせる現代からかけ離れたような場所で、人よりも鹿の数が多いような島
でおじさんと二人っきり混浴とは。。。
非常に微妙な、絶妙にとほほほほな状況。

変な感じだったけれども、寝待の温泉は乳白色でそれはそれは素晴らしかった。
湯船の下は石がゴロゴロ。
あまり、経験した事のない温泉で感動した。
おじさんがZ型になっている塩ビ管をどこからかもってきて、湯船の中でごそごそと取り付けしたらその塩ビ管から
お湯がチョロチョロ。
おじさん、曰く
この温泉は横から湧き出ているんだよー
源泉、飲んでみな。

ゴクゴク。

美味しくない。なんだか、酸っぱい味。
おじさん、曰く。
天然のスポーツドリンクだべ。

ふむふむ。

おじさんと、ずーっとたわいもない話を温泉でしていた。

鹿が車にぶつかってくると凄く危険だとか。
亀の卵を食べた事がある。
とか、お化けの話とか。
出たくても、恥ずかしくて出る事が出来ない私。
おじさんの話を適当な感じで聞いていた。
お化けの話より、どのタイミングで風呂から出るか？
それだけが、私の大いなる課題。すっかり我慢大会の私。ギリギリまで頑張って
じゃ、お先にー
って、逃げるようにしてお風呂から出た。

とほほほほ。
混浴、やっぱりまだまだ私には敷居が高かった。でも、温泉でホカホカした私はパワーアップ。お先真っ暗的な暗闇をものともせず部屋までまっすぐ帰る事が出来た。外が真っ暗だとしても、目的地がハッキリしていればハキハキと前に進むことができる。身体がホカホカで元気であれば、それほど怖い思いもしない。
そんなことを実感した私。
全ての体験が、素晴らしい。人生至上、最強の暗闇体験も今となっては貴重な体験。
世界のはずれで知らないおじさんと二人っきりで入った混浴も貴重な体験。
ふむふむ。

最後の晩餐

佐々木さんタカさんに大変お世話になった、屋久島の旅。
出会いの不思議。もし、春一番が吹かなかったら出会わなかったかもしれない。
ちょっと、タイミングが会わなかったら出会わなかったかもしれない。
それが、出会いの不思議。
偶然という名の必然。いろんな事が不思議でたまらない。

新車のホンダ　スーパーカブを買って屋久島に行く

運命の三〇三号室が出す不思議なお題。やって良かったなあ。
屋久島、来て良かったなあ。
佐々木さん、タカさんに出会えて良かった。
寝待に行けて良かった。
あのブラックホールみたいな闇に出会えてよかった。
混浴もこの際、経験できて良かった。
冒険、できて本当に良かった。

良かったことずくめだ。素晴らしい。

屋久島出発の前日は、みんなで遊んだ。佐々木さん、タカさん、二人の友達、一生さんも加わって磯遊びをした。陣笠という貝をとって食べたりした。一生さんは屋久島で育ってきただけあって、ひょいひょい色んなモノをとってくる。私には岩しか思えないのがトコブシという貝だったり。亀の手という貝もあった。
本当に亀の手みたいな貝。本で読んだことがあったから、本物の生息風景を見る事ができて、これまた感無量。でも、小さいから採るのはやめようねってやめた。
みんなで子供みたいに磯遊び。屋久島の海はキラキラ。磯をのぞくと沢山の色がひしめき合っている。
佐々木さんが言う

自然の色は素晴らしい。
生きている証の色だと。

帰りはみんなで魚屋に行って、最後の晩餐のお買い物。
お家に帰ってきて、これまたみんなで夕飯の支度をした。一生さんが一番、魚をさばくのが上手。
すごい、すごいでみんなで拍手。
ご満悦の一生さん。

笑顔あふれる最後の晩餐。
トビウオの刺身、美味かった。
採ってきたトコブシ、美味かった。
珍しいカニの朝日蟹、美味かった。
タカさんの手料理、美味かった。
屋久島到着して、あれよあれよと日は過ぎた。恵まれすぎている出会い。

ありがたい。

この世は、ワンダーランドなんだね。
この世は、ミラクルワールドなんだね。
そんなことを、経験するために生きているのかもしれないね。
なんて、ふと思った。

毎日、毎日、何かに出会っている。
小さな出会いから大きな出会いまで、とにかく毎日、毎日何かに出会っている。
その全てが奇跡なんだって思えたら、きっとこの世はミラクルワールド。
その全てが不思議って思えたら、きっとこの世はワンダーランド。

そんなものかもしれないね。

2年の命プロジェクト終わり

気がついたら、2年の命プロジェクトをはじめて2年が経ってしまった。
部屋の更新のお知らせがきた。
そう。運命の三〇三号室は、2年が過ぎても継続して借りることができるようになった。2階に住宅のモデルルームができたのだ。まだまだ、取り壊されないで済みそうだ。
もちろん、2年が過ぎたからといって私は死ぬことはなかった。
これで、もし万が一死んでしまっても、後悔が残らない生き方をした2年。
やりたいこと、全て出来たわけじゃなかった。
でも、出来る限りのことはした。
だから、死ぬ事になってもそんなに後悔は残りそうもない。出来る限りをするって、清々しい。

結局、運命の三〇三号室が私に出したお題は2つ

例えば、2年の命
と
新車のホンダ　スーパーカブを買って屋久島に行く

その後にも先にも、部屋からのお題を感じることはなかった。そう考えると、貴重なお題だった。妄想、勘違いなのかもしれないけれどもこのお題は私を突き動かした事は確かなこと。
それで、得た経験は私にとって宝物のような経験。
妄想でもいいじゃない。
勘違いでもいいじゃない。
宝物的時間を持てたんだもの。
ま。
なんだって、いいと思う。
なかなか出来ない体験が、できたから。
そんな、時間を持てたのは実に良かったと思う。

人生ヒント盛りだくさんの体験だった。
と、思う。

世の中は、私にとってワンダーランド。
不思議なことがいっぱい。

世の中は、私にとってミラクルワールド。
奇跡的なことがいっぱい。
そんなことを体感した2年間。

大事な事は、その時、その時、ベストを尽くすってことだと思った。
生きる態度が、真摯であること。
そういう生き方をしていれば、いいような気がした。

ふむふむ。

あとがき

この本は全て、手作りの本になります。なので、乱文、乱丁もあるかもしれません。装丁も一つ一つ違ってくる予定です。もしかしたら、これから加筆することだってあると思います。完全無欠の完成本ではないです。

只今、二〇一二年。

ようやく、形になりそうでワクワクしてます。時が経つと不思議なもので、強烈体験も忘れてしまったり、記憶が薄れていったりするものでした。ビックリです。

それで、焦燥感にかられて本を作ろうと思いました。

いろんな経験を忘れていく自分の為に。

思い出しながら、書いていくうちに、あの時の自分に再度、出会う事ができました。とても不思議な感覚です。

同じ、自分なのに全く別人のよう。あの時の私が、今の私を勇気づけます。

思いついた事は、出来る事なんだと。

扉があったら、叩けと。

出来る限りをしなさい、と。

本当、そうだな。

その通りだよ。

って、思います。

なんだって、出来る。
って、自分を信じることができます。

もう一度、私のプロジェクトがこの本から始まります。
ドキドキ。
ワクワク。

例えば2年の命プロジェクトのやりたい事リストにも、ありました。
本をつくる。
って、ようやく1冊目が完成です。
面白いことに、本をつくったら、欲が出てきました。
たくさんの人が読んでくれる本になりますように・・・・
って。

しばらくは、内職の日々が続きそうです。

ありがとうございました。

あとがき　2

只今、二〇一四年。
そうです。この本を作ってから二年が経ちました。この本は書きながら、自分自身に勇気を与えてくれました。おかげさまで、やりたかった事の一つ。
ゴハン屋さんをオープンさせることができました。ビックリするほど、スムーズにできあがった店は
きっと屋 kitchen
と、いう店です。

　そして、書きながら猛烈に佐々木さんとタカさんを強烈に思い出しました。
出来上がった本をあげなくてはならない。って、思ったのです。ただ、連絡先が古くて連絡がとれないでいました。
そうしていたら、ふと気がついた事。
タカさんの息子さんのメールアドレスがある。
ってこと。ダメもとでタカさんの息子さんにメールを出しました。
すると、返事がかえって来たのです。そんなわけで、タカさんと連絡がつきました。
そして、残念なことに佐々木さんはこの世を旅立ったことを知りました。
なんて言っていいのか、言葉が見つからない。

寂しい感じがしばらく私の中にありました。
でも、生きているうちに出会えた事は私にとって宝物。
出会えた事に感謝しました。

そして二〇一二年、タカさんは私がお店をオープンさせると聞いて鹿児島からはるばる会いに来てくれました。
なんと、８年ぶりの再会を果たしたのでした。それからは毎年、果物を贈り合ったり、電話で長話したりしてます。
本当に良い出会いをしたなー。しみじみ。

いつも思います。
出会いの不思議。
絶妙なタイミングの不思議。
考えすぎる事ができない私は
風が吹いてる！
と、感じて、思い込んで、事を進めてしまいます。
風というのは、いつも吹いているわけではないので風がふいてるぞ！
と、感じたら出来る限りその風にのりたいなー
と、呑気に思います。
行動力があるねー

と、最近よく言われますがそんなことはないのです。
風に乗ってるだけですから。
私的には行動力。なんて、たいそうな感じではないのです。
しまったー！
と、思う時もあるし。
なんでー！？
と、思う事もあります。
でも、しまったー！もなんでー！？もなかったらつまらないな～とも思うのです。
うまく行くのも楽しいし、うまくいかないことも意外と面白い。
どっちに転んでも楽しい。
くらいに思っているのが楽でいいです。
とうとう、今年は目標の１００冊が完成する予定。
いやあ～。楽しみだな～
友達になんで１００冊も作るの？
と、聞かれた事があって
１００冊、作ったら何か起こるはず！
その何かを知りたいから。って、答えました。
いよいよです。

きっと、完成したら何かが起こる！
それは、何だろう？
いやあ。楽しみで仕方ないです。こうして、電子書籍化もしちゃったしね～
ワクワク。ドキドキ。ランランラン。
ではでは！
ありがとうございました♪